はるか昔、遠く彼方の異銀河で。

1

「サミュエール！　いるかあ！」

階下からいつもの耳障りな声が聞こえてくる。僕は、だんまりを決め込んでいた。向こうはもう耳が遠くなっている。こちらから返事をしようと思うと、大声を出さないといけない。ドアは閉めきっているのだ。

「サミュエール！」

声が大きくなった。これもいつものことだ。耳は遠くなっている癖に声は響く。いや、遠くなっているから大きくなるのだろうか。僕はまだ聞こえないふりをしてだんまりを通す。あとは根競べである。

「おおい！」

僕の名前を呼ばなくなった。しびれを切らしている証拠である。十年ぐらい前までは、ここまで粘れば向こうは勝手に部屋まで上がってきた。でももう今は足も悪くて、階段の上り下りを避けている。

「サミュエール！」

僕は閉めきったドアを開け放って、吹き抜けの廊下まで出た。下に父の顔が見える。鬱陶しいほどに伸びた蓬髪の先端が、突き出た下腹の上に鎮座している。

根競べは、いつも僕の負けで終わるのだ。向かいの部屋で寝たままの弟がうらやましい。弟は僕より粘り強いから、父も面倒くさがっていつも僕を標的にするのだ。

「なんなんだよ」

僕は敢えて声色に苛立ちを滲ませた。図々しさが服を着て歩いているような父には、全く効かないことはもう分かっている。

「いいから、ちょっと来てよ」

父は用事の内容を言わない。ということは、しょうもない用事なのである。言うと「後にしろ」という反駁を許すから、隠しておくのだ。自分の老齢への同情を期待した狡猾なやり口である。

僕は、観念して気怠そうにゆっくりと階段を降り始めた。これも、父へのささやかな抵抗のつもりである。僕が降り始めるのを確認すると、父もよたよたと歩いて部屋へ戻った。

「ちょっと、これ、分かるか」

父の用事はいつもこれである。数学の問題を、出されるのだ。

ご丁寧に、紙に書いてある。

僕はその問題を一読した。正直、どこから手を付けていいか全く見当もつかなかった。左側に9が並んだ数を例示してくれただけでも父にしては親切である。

父の顔を一瞥する。満足そうな表情をしている。僕の表情が曇ったのを、見逃してはいない。

僕は机の上にあったペンを手にとった。

「１６４１は、３の倍数だね」

1641＝3×547

僕はそう独りごちながら問題が書かれた紙の余白に計算式を書いた。こんな独り言は言わなくてもいいのだが、いちいち「進捗状況」を報告してやらないと父がうるさいのだ。

「そうだ。５４７はどうかな？」

机の向かいに座っている父が覗き込みながら言葉を投げかけて

9	各桁の数が全て９の数がある。
99	この数が 1641 の倍数になるのは９が何個並んだときか。
999	
9999	
99999	
⋮	
99……99	

くる。僕は無視して割り算を続ける。５４７は２でも３でも割れない。７でも割れなかった。１１でも割れない。１３、１７、２３まで割れないところが確かめられたところで、折り返し地点に来たことが分かった。

５４７は素数だ。

「ということは、３が並んだ数の中から５４７で割れる数を見つければいいわけだ」

僕はまた父に聞かせるためだけの独り言を言った。父は、性根の腐った笑みを浮かべていた。

「まあそういうことだがな……」

ところがまあ、そこからどうやって進めればいいかはちっとも検討がつかなかった。僕が頬杖をつくと、父が一層口を曲げて笑っていた。

「どうした？　この程度の問題ならオルレアン大学の入試問題に出てもおかしくないぞ。今のとこ、２０点満点の問題だったら１点ぐらいしかもらえないぞ」

入試問題という単語を聞いて分かった。今年が１６４１年だから１６４１を問題に持ってきたのだ。ということは、この１６４１という数はおそらく何でもいいのだろう。何十年と前から趣味で数をいじっている父がこの年のためにこの問題を温めていたとは思えない。何でも良くはないにしても、かなり条件は緩いはずだ。

そういうことを言うと父が饒舌に自慢話を始めるだけなので、僕は黙って考えていた。

「分からんか？　流石にもうちょっと奥に進んで欲しいんだが」

「分からないよ。大体僕は父さんと違って数学的素養がないんだ」

「そんなことはないさ。うちの一家の中では一番だ」

この「一番」という言葉には、当然「自分を除いて」という含意がある。性根の腐った父が素直に人を褒めることは絶無と言ってよい。

「母さんもテオもお前以上に五里霧中だからなあ。あの２人は１６４１が３の倍数だってことにすら辿りつけないぞ」

「あの二人は、３の倍数の判定法の仕組みすら理解できないからね」

「俺があんなに分かりやすく説明してやったのに、ちっとも理解しようともしないんだ」

「それは多分、理解ができないんだよ」

父の説明はお世辞にも分かりやすいものではないが、僕は黙って乗っかってやった。同時に、父の話に同意して頷いてやったことに若干の罪悪感を覚えた。でも、母と弟に牧以上に数学的素養がないのは確かなのだ。僕も３の倍数の判定法を意を尽くして説明してやったことがあるが、その時の母は全く興味がなさそうだった。

「うーん。この問題は全く手も足も出ないよ父さん。降参だ」

「そうかそうか。はっはっは。随分早いな」

父の顔は、邪気のない笑みでいっぱいだった。腐った性根の上に邪気のない笑みを貼り付けられるのが、空恐ろしかった。

「もう答えを言っていいのか？　もうちょい考えるか？」

「教えてよ」

10^{546} を 547 で割ると 1 余る

ゆえに $10^{546}-1$ は 547 の倍数

そして $10^{546}-1=\underbrace{99\cdots\cdots\cdots\cdots9}_{546\text{個}}$

「答えはな、５４６だ。９を５４６個並べた数は１６４１で割り切れるのだ」

「５４６。５４７から１を引いた数なんだねえ」

「そうだ。そこがミソだ」

「何で５４６なの？」

「１０の５４６乗を５４７で割ると１余るからだ。そうすると、そういうことだろ」

父は汚い字で余白に説明を書いた。この説明自体は分かるが、大本が分からない。なぜ１０の５４６乗を５４７で割ると１余るのだろうか。

「父さん」
「お前の聞きたいことは分かる」
父は遮るように僕の目の前に手を出すと、また何やら書き始めた。

一般に、ｐが素数で、ａがｐの倍数でないとき

a^{p-1} をｐで割った時の余りは常に１

「そういうことだ。５４７は素数で、１０と５４７は最大の共通因数が１だから、この定理が使えるんだ」
「この定理は正しいのかい？」
「ああ」
「なぜ？」
「正しいねこれは」
父の目は真っ直ぐだった。いや、その視線はどこか遠くで屈折しているような気がした。こういう時は、きちんとした証明をこの人はしていない。根掘り葉掘り聞いても、ムッとするだけである。僕は、諦めた。ひどい徒労感が、両肩にのしかかってきた。
僕の表情を読み取ったのだろう。父がゆっくりと口を開き始めた。
「ｐが１３の時までは確かめた。確かに、常に余りは１だった。この私が６の１２乗を計算してやったんだぞ」
「いくつだったんだい？」
「計算した紙は捨ててしまったよ。ただ６の１２乗ぐらいなら割と簡単に出るんじゃないか？　要は１２９６の３乗だからな。いやまあ、そんな律儀に計算する必要もないんだけどな。要は余りが出たらどんどん引いてってやればいいからな」
６の４乗が１２９６だということはもう頭に入っているようであった。普段からそういうことばかり考えているからもう暗記してしまっているのだろう。母に言わせれば、覚えても屁の役にも立たないことを。
「とにかく、１３まで正しかったんだからこれはもう正しいだろう。これ以上のことをやるのは無駄というものだ。私が１４２８５７に７をかけると９９９９９９になると言っているのに疑ってアバカスを弾き出す商人がいるが、それと同じくらい無駄なことだ。数学的な真理はいつだって数学的な真理なのだ」
僕は１４２８５７×７の筆算をしてみたくなったが、こらえた。そんなことをすると眼前の性悪は鬼の首をとったように喝采をあげるだろう。
でも僕は、ふとこの状況に苛立ちを覚えた。何でこんな肥えた猪のような大男の顔色をうかがって生活をしなければならないのだろうか。僕は１４２８５７×７の筆算をしたくなったら、できて然るべきである。
僕は、父に抵抗を試みた。
「父さん、最初の問題だけど」
「なんだ？」
父はまだ僕の中の叛乱分子に気付いていない。無防備な下っ腹をさらしている。
「５４６以外に答えはないの？」
「あのなあ。ちょっと考えれば分かるだろ。５４６の倍数は全部答えになる」
相変わらず身内には角の立つ言い方しかできない男である。いや、若い頃は外の人間にもできていなかったんだろう。５４６の倍数が全部答えになる仕組みもちょっと気にはなったが、僕は芽生えた好奇心を摘み取って父に疑問を続けた。
「いやそうじゃなくて、５４６より小さい答えはないの？」
「ないね」
「何で言い切れるの？　全部確かめたの？」
自分でもびっくりするぐらい矢継ぎ早に詰問の言葉が流れ出てきた。よほど日頃の鬱憤が溜まっていたのだろうか。相対する父は、眉間に皺を寄せていた。

「ご主人様」
緊張を破るように使用人の声が聞こえた。うちで一番古株の下男である。
「神父がお見えです」
一瞬晴れたかに見えた父の表情は、さっきよりも曇った。きっと、会いたくないのだろう。機嫌が顔にすぐ出る分かりやすい男なのである。

「サミュエール！」
また父の怒鳴るような大声が階下から聞こえた。僕はまただんまりを決め込んだ。
「サミュエール！　神父が会いたいそうだぞ！！」
僕の反応が悪いとこうやって他人をダシにするのである。蓋を開けてみればダシにされた他人はそこまで真剣に僕に会いたいわけではないということも何度もあった。父が僕に用があるだけなのである。「そういえば御子息はおいくつになりましたかね」と尋ねようものなら、これ幸いとダシに使ってくる。僕がそういう理由に弱いことを知っているのである。根は卑怯で悪辣な男なのだ。
「サミュエール！」
父の怒声は一層大きくなった。客の前でそんなに大きな声を出せばみっともないことぐらい父も分かっている。外面を良くしようという心意気だけはあるのだ。だから、あそこまで大きい声を出しているからには、十中八九神父はもう帰ったと考えて差し支えない。
「サミュエール！」
父のみっともない咆哮に終わる気配は見られなかったので、僕は「神父はまだいる」と自分に言い聞かせて階段を下りることにした。勝手知ったる自分の家である。僕は応接間へと歩を進めた。
廊下には、父が趣味で集めた数学やらなんやらの本が乱雑に積まれている。生まれながらの王侯貴族であればとても客に見せたがらないような醜態である。応接間の中は、もっと物で溢れている。いずれ廊下も父の収集癖に占領されてしまうだろう。
応接間の扉はガラス張りになっている部分がある。ガラス越しに、神父の顔が見えた。幸い、まだ帰ってこないようだった。神父とは何度も会っている。僕はノックもせずに扉を開けた。僕を見やった神父の顔は、綻んだ。
「おお、おお。大きくなったなサミュエル君」
「そうですかね」
僕は神父の話に適当な相槌を打ちながら父の方を見た。父は機嫌が良いのか悪いのかよく分からない表情をしていた。
「君からも是非お父上を説得してくれないか。お父上の素晴らしい才能は、私のアカデミーでも是非輝くだろう」
「神父。さっきも言っただろう。私にその気はない。その話は息子にはしない約束だったじゃないか」
「あっはっはすまない。でも君の出した問題は解けたじゃないか」
父が割り込んできたが、神父は意に介していない様子であった。用件は、いつもと同じである。神父が運営しているアカデミーで何かの講義をして欲しいというのである。神父はそれをきっかけに、父をアカデミーに参画させようとしているのである。
僕は机の上の紙に目をやった。父の汚い字で書かれた問題の下に、神父の綺麗だが今にも消え入りそうな筆跡が並んでいた。たぶん、「この問題を解いたら行ってやる」というような条件をこの場で出したのだろう。父としては絶対に解けない問題を出したつもりが、神父に解かれてしまったのだ。父は昔から他の数学者の力量をなめてかかる悪癖がある。それで必死に平静を装おうとした結果、魂の抜けた狸のようななんともつかない表情になってしまったのだ。父の思考過程は、手にとるように分かった。
「あはは。サミュエル君のお顔も拝めたところだし今日はこのあたりでお暇しますが、私は諦めませんからねピエール。あなたの才は決して孤立させるべきものではない。他の異才と交わることで、絶対に乗算以上の効果が出ます」

神父の語気には、熱がこもっていた。私は父がその手の熱を嫌がる人間だというのが身に染みて分かっていたので、また不機嫌にならないかと不安になった。神父も、ここまでしつこくやるならもっとやり方を考えた方がいい。というより、もっと父のことを知った方がいい。父が不機嫌になると割を食うのはこっちなのである。

2

運ばれてきた被告人は、前頭部がだいぶ寂しくなっていた。目は不敵に輝いている。この第一印象でだいぶ判決の内容が左右されるのだから、もっとしおらしくしていればいいのにといつも思う。

検察官が起訴状を読み上げる。新聞屋も大きく騒いでいた事案である。気を付けても、耳目には侵入してくる。王党派の一員である僧侶が、貴族の私邸の庭に侵入したというのである。すぐお縄になったのでそれ以上のことはしていないようである。

最近は王党派と貴族の対立が激しい。帝王ルイ13世とお付きの役人たちは、貴族の力をあの手この手で削ごうとしている。法院は、昔から貴族の権力の源であった。それを王の直轄下に置くために色々とちょっかいを出してきているのである。そのせいで、面倒な政治的対立が絡む事件も増えている。

目の焦点が合わぬまま正面の時計の方をぼんやりと見ていたら、検察官の説明が終わった。検察は王の息がかかった組織である。この事件をひっそりと終わらせたいのであろう。貴族側の罪人に対しては拷問も辞さない連中が、大した捜査もしていない。邸宅侵入1件のみという微罪でこの裁判を終わらせようとしている。

自分の番が回ってきたことにハッと気付いた。私は狼狽をできるだけ隠して厚みのある声を出した。

「被告人、今の検察官の説明に間違いはあるかね」

被告人の目は一層爛爛と輝きを増した。

「あります。私は侵入などしていません」

本当なら被告人がここで罪を認めて終わるはずであった。検察官もそのつもりだったろう。私は法廷の右側にいる検察官を見た。彼も、努めて狼狽を隠そうとしていた。

私は、一瞬天を仰いだ。見えたのはくすんだ色の天井だけだった。

「いったん休廷にしよう」

私は傍聴席に座っていた院長が憎々しげに立ち去るのをずっと眺めていた。立ち上がる気力が出なかった。

「分かっているよなピエール」

裁判官室には院長が先回りしていた。よくここまで気が回るものだと、逆に感心しそうになる。

「お前の仕事はあの僧侶にできるだけ重い判決を出すことだ。我々は高等法院だぞ。王家ごときにナメられてはならん」

私は、反論をするのも面倒くさかった。

「返事くらいできんのか」

院長の語気は強くなっていた。そんなにこだわるなら、自分で裁判をすればいいのにといつも思う。

「聞いておるかピエール！」

「でもまあ、彼は有罪を争うようです。裁判は水物ですからね」

「そうだ。それを好機だと思わねばならん。どうせあいつは有罪になるしかないのだ。否認をしてくれた方が『反省の色がない』という理由でそれだけ長いこと刑務所に行かせることができる」

この手の金勘定をしている時の院長の口ひげは、実に下品に跳ね上がっている。

私が答えあぐねていると、院長は更に語気を強めた。

「ピエール。まさか変な気を起こしちゃいるまいな」
彼の言う「変な気」とは、当然無罪判決である。まあ、ションベン刑の有罪判決も含むのかもしれない。出てきた証拠を全部見て論理的に導き出した結論が「無罪」ならそういう内容の判決を出すのが我々の仕事である。それを「変な気」扱いとは随分な物言いだと、この仕事にさほど関心のない私ですら思う。
「高等法院に入れるのは大学できちんと勉強をした貴族だけだ。そのことをよく考えることだな」
「まあ、この仕事はバカにはできませんからね」
私の中で、ほんのちょっとだけ反抗心が芽生えた。目の前で威張っている男への敵愾心だけから生じた、ほんの小さな反抗心に過ぎないが。
「そうだバカにはできない仕事だ」
院長は座っている椅子をゆっくりと回転させてこちらに背もたれを向けてきた。小物かもしれないが、バカではないのは確かなのだ。
「その意味を考えろと私は言っているのだ。バカではない我々に求められている役割は何か、をな。それは徹底した論理的思考ではない。貴族に何が求められているか、を五感を通じて読み取る能力だ」
院長は芝居みたいにたっぷり間をとってしゃべっていた。随分堂に入った物言いだった。たぶんこの手のことを何度となく新人や後輩に言ってきたのだろう。だから、院長になれているのだ。
「ここまで言えばバカではないお前には分かるよな。お前の仕事は、バカには反駁できないような理屈を有罪という結論に付けることだ。有罪か無罪かを考えることではない」
結局ストレートに要求を言葉にしてしまっている。それも上に立つには必要なのだろうか。
「君の得意なことだろう。いっつも数式をこねくり回して屁理屈を考えているではないか」
「院長」
「なんだ」
「数学は屁理屈ではありません」
院長の表情は崩れていなかった。頭に血が上った私には、それ以上の言葉が出てこなかった。それが、悔しかった。蛇のようなこの男にはどんな小粋な理屈も響かないだろうと自分に言い聞かせて、無理やり納得することにした。

自分の執務室に戻ると、書記官が狼狽した様子で辺りの廊下をウロウロしていた。私の顔を見ると、すぐに駆け寄ってきた。
「判事。検察官側から今日は何も用意していないので審理をこれ以上進められないという上申が来ています」
「そうか。それはこっちもそうだ。次の期日だけ打ち合わせして決めておいてくれ」
「分かりました」
書記官は冷や汗を垂らしたまんま下の階へと消えていった。書記官用の法服が似合わぬ落ち着きのなさである。もっと堂々としていればいいのに、と彼を見るたびにも思う。私もあんまり、人のことを言えた義理ではないが。
私は執務室の自分の部屋に座ると、引き出しから紙を取り出した。時間ができると自分で数学を始めるのはいつものことである。書き損じの紙のスペースに数式を書きながら考えるのだ。それにしても、院長はなぜ私の趣味のことを知っていたのであろうか。多分、裁判官一人一人の執務室に侵入して物をあさっているのだろう。実に根性の悪いやり口である。
引き出しから出した紙を見返して思い出した。この問題も昨日袋小路に入っていたのだった。色々考えても、堂々巡りで脱出口が見出せなかった。私が途方に暮れていると、ノックが聞こえた。多分、先ほどの書記官だろう。次の期日が決まったのではないだろうか。私が腕を組んで昨日書いた数式を睨みつけていると、またノックが聞こえた。今度は強く

なっていた。私は、書記官に「入れ」と一切言っていなかった。頭の中で考えを巡らせただけで言ったつもりになっていた。

「ああすまんすまん。入ってくれ」

やおらドアを開けた書記官の目にはかすかな安堵の色が見えた。

「検察側は１ヶ月先がいいそうですが」

私もそれを聞いて、にんまりとほほ笑んだ。そんなに先延ばしにできるなら、上出来だろう。

「よし。そのへんで調整しておいてくれ」

書記官が出ていくのを視界の外に感じながら、私は紙と向き合った。

これは私がこの前別の問題を考えている時に思いついた問題である。正解は、１０と５か、３と６という組み合わせである。２２５は平方数と立方数の和で２通りに表される尊い数なのだ。

この問題をサミュエルに出してやろうと思ったが、すぐに簡単すぎることに気が付いた。立方数はすぐに大きくなる。６の３乗が２１６なのである。だから、ｂについては１から６までの６パターンだけを検討すれば答えが出てしまう。そんな虱潰しの解法を実行されても面白味がない。だから私はこの問題をもっと難しくすることにした。難しくするのは簡単である。右辺の２２５という数字に、平方数でも立方数でもある数をかけてやればよい。平方数でも立方数でもある数というのは、すなわち６乗数である。正の数の中で最小の６乗数は当然１であるが、１をかけても問題は変わらない。だから私は次の６乗数、６４（すなわち２の６乗）をかけてやることにした。

これで，グッと難しくなるのである。虱潰しは非効率である。それでもサミュエルは、それをやってしまうだろう。一回袋小路にはまるとなかなか発想の転換ができないのがアイツの悪いところである。まあそれは世の数学者連中もそうなのであるが、そういう悩みとはもっと高いレベルの所で戦ってほしいものである。あいつが唸っているのは、随分手前の領域なのである。

ａとｂはいずれも正整数である。

$a^2+b^3=225$ となるａとｂを求めよ。

確かこれは、あいつは解けなかった。１４４００が２２５を６４倍した数だということには随分長い時間をかけて気付けたようだった。そこから、８０と２０、２４と２４という組み合わせは見つけられたようであったが、それでは不十分である。この問題にはもう一つ答えがある。どうやって見つけたらいいかを私は知っている。でもそんなものを公開するわけではないではないか。自分だけが知っていることというのは、この生き馬の目を抜く社会を渡り歩くにあたって最後まで守り通さなければならない宝である。それをわざわざドブに捨てるような真似はしないのが賢明なのだ。自慢話ばかりしている連中は、いつか身を持ち崩す。世の中は、そういう風にできているのである。

またこの問題を家でサミュエルに出してやろうか。最近問題を出しすぎて新しい問題のストックがもうないのである。この手の問題は似たようなものをいくらでも作れるが、類似品が続くと私の才のなさがサミュエルにばれてしまう。ただ、これをもう一度出してサミュエルをからかうのもおもしろいかもしれない。今度は３の６乗、７２９を２２５にかけてやろうか。

そんな複雑な問題だって、答えは出る。数学は人間と違って嘘をつかない。人間は、色々な理由で嘘をつく。大抵の場合は「自分の身が可愛いから」という極めて実利的な理由なのだが、とにかく声高に虚偽の主張を述べる輩がそこかしこにいる。今日法廷に連れてこられた僧侶だけではない。検察官や裁判官のような高貴な身分の連中だって同じである。嘘をつかれると、それを嘘だと暴いて反駁をすることに知のリソースを

ａとｂはいずれも正整数である。

$a^2+b^3=14400$ となるａとｂを求めよ。

割かねばならない。それは、とても非効率なことである。
　別に、結論が出ていないことに対してはどのような主張をしてもよい。未知なるものに対する探究心が学問を前進させる原動力になるというのは繰り返されてきた歴史である。錬金術を定式化しようという試みが化学を発展させ、永久機関への少年のようなナイーブな憧れが熱力学の根本法則を生み出したのである。「卑金属から金が生み出せる」という命題も「永久機関が実現できる」という命題も、結果論としては嘘であったが、はっきりとした結果が出る前はその真偽は不明であった。真偽不明なものの真偽をはっきりさせようという彼らの態度は、まさに科学に殉じるものである。無論、これらの命題が真であると信じて取り組んでいた賢人もいただろうが、それは命題の真偽を判定するにあたって必要な（「不可欠な」と言ってもよい）、単なる仮説にすぎない。仮説に過ぎないという前提に立てていたからこそ彼らは賢人であり、紛うことなき科学者だったのである。
　裁判の世界で出てくる嘘はこういったものとは違う。時に、すでに結論の出ている問題に対して虚偽の主張を曲げない輩も出てくる。人間の頭というのは案外脆弱にできていて、明らかな虚偽の主張であっても大声で繰り返されるとなんとなく真なる部分があるように思えてきてしまうのである。無視できなくなってしまうのである。そのため、こういった虚偽の主張が出現すると、それを否定するために過去に行われた検証をまた繰り返す必要がある。だから、非効率なのである。
　数学ではそのような非効率はない。数学に身を捧げた者は、みな真理の探求のみを是としている。真理をひとつひとつ暴いていくことが数学者の何よりの喜びなのである。それ以上の「わが身可愛さ」など存在しない。数学は全身全霊を捧げるに値する学問の中の学問なのである。

3

　階下からのっしのっしと足音が聞こえてきた。父の足音はすぐ分かる。鈍重でのろいのである。僕は平静を保つよう努めた。祈ると、悪い方向に転がってしまう。

「サミュエール！　サミュエール！！」

　ダメだった。平静を保つよう努めた時点で僕の負けだったのだろう。そういうことに一切関心のないような無心の状態を貫かないと、あの疫病神は背後から何本も手を回してくる。
　僕はいつものように聞こえないフリをした。向こうも帰ってきたばかりである。色々とやることもあるだろう。しばらくは時間が稼げるはずである。帰ってすぐに声をかけてきたのは、そういうタイムラグが生じることを向こうも見越しているからではあろうが。

「サミュエール！！」

　父はもう一回僕を呼ばわった後、自室の方へ消えていった。これも足音を聞いていれば分かる。弟は、いるのかいないのかがはっきりしなかった。
　僕は原稿に向き合った。ちょうど次の展開に詰まっていたタイミングだったのが口惜しい。原稿が順調なら父の声もこんなにすんなりと侵入してこないのだ。父から呼ばれていることを意識しだすと、もう原稿どころではない。

「おーい！　サミュエール！！」

　父の声は一段と大きくなった。自室から出て階段の下に来ている。僕はまただんまりを決め込んだ。いないフリである。寝たフリと解釈してもよい。足が悪い父は階段を上がることを極端に嫌う。こちらがだんまりを決め込んでいれば、いつかは喉も枯れるだろう。

いつもはその喉にさえ負けてしまうのだが、今日はなぜか負けたくなかった。多分、原稿が進まなくてムシャクシャしていたのだろう。

僕は利き手の人差し指と中指の間に挟んだペンを凝視した。すると、背後からゆっくりと「のっしのっし」という足音が聞こえてきた。すぐに分かった。父が階段を上ってきている。

僕は観念した。途端に何もする気が起きなくなったので、手持ち無沙汰になった。僕は立ち上がって部屋の中をウロウロし始めた。

「入るぞ」

僕が返事をしないうちに父はドアを押し開けて、部屋に闖入してきた。

「クソ暑い部屋だな相変わらず。何をしてるんだ」

「いつも通りだよ」

僕の返答を受け取った父もいつも通り、無遠慮な物言いをしていた。

「またいつもの小説か。俺にはあれは全然分からんからなあ」

「おもしろいものを書こうとはしていないからねえ」

僕は、自分に言い聞かせるように言った。この話題で父と言葉を交わしているとどうしても泣き出しそうな気持ちになってしまう。こんな男に負けるのは心底悔しかった。

「やっぱり、小説なんかより数学の方がいいぞ」

「もう何度も聞いてるよ。その話は」

「言語は変わるんだ。小説は百年後の人には読めるかもしれんが、五百年後の人にはほぼ読めないだろうな。数学はそういうことはない。千八百年が経った今もディオファントスの業績は燦然と輝いている。それは、数学という共通の道具を通じて彼の考えや発見を現代の我々も理解することができるからだ」

「別に僕は有名になりたくてこれを書いているわけでもない。歴史に自分の名前を刻みたくてこれを書いているわけでもない」

「そうか」

父はまたゆらりと歩んで、本棚にあった本を一冊手にとった。パラパラとページをめくりながら中身を一瞥すると、すぐまた棚に戻した。

「本当にそうか？」

いつもはあそこで引き下がる父が、今日は踏み込んできた。

「お前は『有名になりたい』とか、『歴史に名を残したい』とかがこれっぽっちもないのか」

「そりゃあ『ない』って言えば嘘になるよ。金や名誉はあるに越したことはない。色々なことができるようになるからね」

「父親相手にかっこつける必要はないじゃないか。そういう奥歯に物の挟まったような物言いはやめろ。本心を言ってみろ」

やはり今日の父はぐいぐいと踏み込んでくる。何でこんなに詰めてくるのか、見当がつかない。

「お前は今言った。自分が小説を書くのは金や名誉のためではない、と。副次的にそれが得られるのであれば辞退はしないが、それが主目的ではないと。本当にそうなのか！？」

「なんだよ。何が言いたいんだ」

「本当は金や名誉を得ることが主目的じゃないのか！？　今のところ全然結果が出ていないから、『それが目的じゃない』などと嘘をついてかっこつけているだけじゃないか！？ええ！？」

「じゃあ父さんはどうなんだ！？」

僕は思わず激昂してしまった。涙腺が自然と緩んでくるのが分かった。

「なんでメルセンヌ神父の誘いに一向に乗らなかったんだ。なんでデカルトさんに嫌味みたいな手紙をずっと送り付けてたんだ。『自分が数学を楽しめればそれでいい』とか言ってたけど、それは嘘なんじゃないか！？　本当は世の人たちに自分の凄さを分かってもら

いたいんじゃないのか！？　本当の数学の専門家に負けるのが怖くて遠ざけていただけじゃないのか！？　自分が大したことないというのがバレるのが怖くて！！」
　大きな声を出せば出すほど、僕は興奮していった。父の顔は霞んでよく見えなかったが、狼狽しているように見えた。それはそうだろう。僕がこんなに大きな声を出すことは滅多にないのである。
「そんなことはないさ。それは勘違いだサミュエル。私はデカルトをからかって遊んでいただけだ」
「どうだかね！　デカルトさんに自分の業績の凄さを理解してもらいたかっただけじゃないか？　それが全く相手にされないもんだから、へそを曲げて後からからかったってことにしたんだろう」
「よくもまあそんな意地悪なことが言えるな」
「先にそういうことを言ってきたのはそっちじゃないか。親が息子にかける言葉とは思えないね」
「どういうことだ」
「目の前の息子は確かにあんまり世の中の人からの共感を得られていない境遇にあるんだ。せめて親だけは味方になるもんじゃないのかね。世間から拒絶されている子どもの味方になってやるのが、親の務めではないのかね」
「……」
　父は黙ってしまった。いつもの邪悪さは目から消え失せていた。珍しく、次に出すべき言葉を慎重に選んでいる風だった。
「サミュエル」
　父がやおら口を開いた。僕は激昂した手前、簡単に相槌を打つこともできなかった。
「やっぱり結局、世間からあまり理解されないのが苦しいのか？」
「父さんもそうだと認めてくれたら、僕もそうだと認めてあげるよ」
「なんだその交換条件は。それはもう、苦しいと認めたようなもんじゃないか」
「父さんはどうなんだい？」
　父は何か言いたげに口を開いた後、台詞をサッと飲み込んでしまった。
「今書いているものは新しいものか？」
「そうだよ」
「読ませては……くれないんだよな」
「どうせ否定的な感想しか言わないからね」
「それを批判として受け止められる人が成功するんじゃないのかね」
「それは理屈だね。さっきも言ったけど、せめて身内からは手放しの賞賛を受けたいもんだよ。身内ゆえの依怙贔屓や色眼鏡だと分かっていたとしても」
「どんな話なんだ」
「……」
　咄嗟に言葉が出てこなかった。正直まだ２頁ほどしか書けていない。どんな話になるかも固まっていないのだ。
「まあ、言いたくなかったらいいよ」
　父は背を向けて部屋を出ていこうとした。
「なんかの用だったんじゃないのか」
「忘れてしまったな」
　僕はちり紙を手にとった。鼻からも涙が流れ出てきていた。僕はそれを父に見られたくなかった。父もこんなことで泣く息子は見たくないだろう。いや、というか、うん。そういうことにしておこう。
「サミュエル」
　父は僕に背を向けた状態で、またさっきの本を手にとっていた。さっきざっと中を見て用済みになった本の助けを借りなければならないほど、父も追い詰められているのだろう。
「俺が自分の父親のことを嫌っていたのは知ってるよな」

僕はものすごく曖昧に頷いた。知っているか知らないかで言えば、知っていた。母がしつこくその話をするからである。でも、父はその話をされるのを心底嫌がっているようだった。だから家の人間は母を除いて、自然とその話題を避けるようになっていた。
「うちの親父は一代で財を成した毛皮商でなあ。商才はあったが学は全くなかった。金の力でどうにかこうにか誤魔化していたが、アルファベットも半分くらいしか読めなかったんじゃないか？」
父の口から祖父のことが語られるのは初めてのことだった。僕はちり紙で鼻を吹きながら目を見開いていた。
「親父には商才以外に人に負けないものがあった。それが名誉欲だ。多分、字が読めないから小さい頃からバカにされてきたんだろうな。自分をバカにしてきた連中を見返してやろうということだったんだろう。とにかく爵位やら学位やら自分を権威づけられるものなら何でも集めていたな。妻に学のある女性を選んだのも、そういう理由だろう」
学のある女性というのは、祖母のことであろう。
「そうやって他人の力に頼るより自分で勉強した方がよっぽど周りから褒められるのに…、と若い頃の俺は思っていたもんだ。だから、努力せずに手っ取り早く名誉を得ようとしている親父が嫌いだった。母のことも俺のことも、自分の名誉欲を満たすための道具としてしか見ていなかったからな。俺に対しては『勉強をして大学に行け』の一点張りだった。だから、俺は子供の頃にあんまり楽しい思い出がないのだ」
父は手にとった本を棚に戻し、また別の本を手にとった。こちらに正対しようとは、しなかった。
「俺はそんな生活の中で数学というものの楽しさに目覚めたのだが、父は数学のことも一向に分かってくれなかったな。そんな屁の役にも立たないことに時間を使うぐらいなら、身になることを勉強しろとしか言わなかった」
僕はまた曖昧に頷いた。
「ただ、俺はある日気が付いたんだ。父も一応毛皮商として成功した身だ。努力ができなければそんな成功を勝ち取ることなどできないだろう。父も、努力して学を身に付けようとしたことがあるのではないかな。でも多分、どうやっても無理だったんだ」
「どういうことだい？」
「俺もはっきりとは説明できない。でも、失明した人に目を治せと言っても無理な注文だろう。俺ら二人にはとっても簡単なことであっても、一向に理解できない人もいる。母さんもいつまで経っても３の倍数の判定法が理解できないじゃないか」
「そうだね」
「世の人にはみな得手不得手がある。時にそれは、努力ではどうしようもないレベルのものだったりする。親父にとってはそのどうしようもないほど苦手なことが、文字の読み書きだったんじゃないかな」
「なんでそう思ったんだい」
僕はもう父の話に聞き入っていた。今日こそは父をやり込めるとあの時決意したのに、もう丸め込まれている自分が恥ずかしかった。父にはそのことを気付かれたくなかったが、多分もう気付かれているのだろう。そうだとしても、知らぬふりをしておこうと思っていた。
「どう考えてもおかしいからな。アルファベットぐらいちょっと練習すれば分かるはずだ。でも父はどうやってもｂとｄの違いが分からなかったんだ。ｂとｄだぞ。死んだ親父の書斎でその二文字を練習した紙を見つけた時は、背筋に戦慄が走ったね。ｂとｄを続けて何度も書いてるんだが、しょっちゅうあべこべになっているんだ」
「へえ」
「俺はそれを見たとき、初めて完全に父を許せた気がしたね。あの人も、可哀想な人だったんだ」
父は眺めていた本をまた棚に戻してしまった。僕は次の言葉を待っていたが、どうもこれ以上続く気配がない。僕にも考える余裕が戻っていた。どういうつもりで自分の生い立

ちの話をしたのだろうか。僕の気を紛らわすための単なる雑談なんだろうか。それとも自分も祖父みたいに歪んだ育ち方をしたのだから、人間性が歪んでいることも許して欲しいとでも言いたいのだろうか。父のことだから、多分後者なのだろう。

4

法廷の空気はピンと張りつめている。目の前の僧侶は、相も変わらず不敵な目つきをしていた。

「以上が事件のあらましです。ご審理をお願いしたく申し上げます」

検察官の声は、穏やかだったが、努めて平静を装っているのが伝わってきた。この被告人が法廷で何を言い出すのかが分からないのだろう。ただこういう場でも本当に落ち着いているように見えるのが結果の出せる検察官である。

検察は王党派だ。そして被告人も王党派である。検察は、この件を微罪で済ませてもみ消そうという方針をとった。ただ被告人はその方針に納得がいっていないのか、完全無罪を主張してきている。要は王党派の中での内輪もめが起きているのだが、被告人にどこまで自覚があるのだろうか。

長い沈黙が続いた。そうだ。私のしゃべる番だ。

「被告人、もう一度貴殿の言い分を確認しよう」

「私は侵入などしていない」

被告人は私のセリフも言い終わらないうちにはっきりと力強く答えた。ただ、目の焦点はどこか合っていない。

「ということは、無罪の主張ということでいいな？」

「そうです」

「それも、入ったけど許可をとっていたとか、そういうことではなくて、そもそも入っていないという主張でいいな？」

「そうです」

「では検察官が犯行時刻と主張する午後3時頃、お主はどこにいたのだ」

「裁判長。その前に検察官の主張を明らかにしていただきたい」

面倒くさいことを言い始めた。ちょっとでもイレギュラーが起きると、いちいち法的根拠の有無を確認しないといけない。私はそんなことを詳しく覚えているわけではない。ただ狼狽を出すとナメられる。こちらも、努めて平静を装わなければバカにされたまま法廷が終わるのだ。院長がそんなことを許すはずがなかろう。私としても、この仕事が片手間なのは確かであるが、片手間でやっているとは思われたくないのである。いや、片手間でやっていると思われてもよい。贅沢は言わない。それを私が察知できるほど態度に出してくれなければ十分である。

法廷にはまた重苦しい沈黙が流れていた。私が黙っているからだろう。被告人が無罪を主張してくるのも久しぶりなのだ。一回休廷にしたのはそういう場合に裁判をどう運んでいくかを学ぶためであったが、ついぞ勉強に身は入らなかった。それを院長のせいにするのは、簡単である。

「検察官。どういう方針で有罪の立証を行うのかね」

私はとりあえず検察官にボールを投げた。なんとなく、そういう進め方をする裁判官を見たことがあったような記憶があった。

「はあ」

検察官の返事は驚くほど気が抜けていた。慌てているようにも見えた。ただ真っ白なままこの法廷を仕切りにきている私に呆れているようにも見えた。そう見えるのは、ひとえに私が慌てているからなのだろう。他人は、鏡なのだ。

「答えんか。裁判官がお尋ねだ」

なぜか被告人が助け舟をくれた。何を言おうとこちらの困惑が増すだけなのだから、黙っていて欲しいものである。

「裁判官。事前にも書面でお伝えしております」
そうだったろうか。それを見ていないとなると、明らかに私の落ち度である。はっきり言えるのは、見た記憶は全くないということである。この場合ふたつの可能性がある。簡単な話であるが、出ている場合と、出ていない場合である。後者の場合、検察官が今堂々と嘘をついていることになる。しかし、それを嘘だと断じることができるほど私も書類の全てに目を通しているわけではない。相手も妙に堂々としている。こちらももっと胸を張らなければ論争ができるとは思われなかった。
「その書面を被告人は見ておらん。もう一回説明してくれたまえ」
検察官は、聞こえよがしにため息をついた。これも、我々にナメられないようにするための芝居である。やりたくないことは、きちんとやりたくないというオーラを出すのが彼らの常套手段である。多分組織の内部でそういう教育をしているのだろう。それを思うと滑稽であるが、その戦法が有効だと見抜いているのはやはり侮れない。少なくとも、私には効くのだ。
「検察官」
私は声の震えを意図的に抑えた。多分，検察官にはばれている。「この裁判官には押しが効く」と思われている。それくらい彼らは人間の弱味を見ている。性悪じゃなければできない商売である。
「検察官」
検察官はまたため息をついた。今度も、聞こえよがしだった。私はもう我慢比べをすることにした。私がずっと黙っていれば、検察官もしゃべらざるを得ないだろう。こちらから話しかけるのは骨が折れる。
そんなことを思っていたら、やにわに検察官が口を開いた。
「証人がいます。目撃証人が」
「一人かね」
「目撃証人は一人ですが、現場に残った足跡が被告人のものでした。その点は現場検証をした警察官にこの法廷で証言してもらいます」
そうだ。確かそんなようなことが書かれた書類を見た覚えがある。警察官の証言ほどつまらないものもない。予定調和すぎて破綻が全くないのである。警察官から検察官へのごますりを見ているようで気分が悪くなる。いや、そういうことを考えている場合ではないのである。
「今日その二人の証言を聞くということでいいのかな？」
「ええ。来てもらっています」
検察官はこめかみをぴくぴくと震わせていた。きっと怒りを表現するための芝居だろう。段取りを何も把握していない私に対する怒りを。仮に怒りは芝居だったとしても、私をバカにしているのは本心かもしれない。
「というわけだ被告人。聞いていたかな？」
私は、自分が聞いたわけじゃなくて、あくまで被告人に言い聞かせているんだよというように見せるためにそう言葉を投げかけた。検察官の表情は見たかったが、それも見透かされているようで、そちらの方に視線を向けることはできなかった。
被告人はといえば、下唇を少し引っ込めたような口のまま曖昧に頷いた。何かケチをつけて欲しかったが、そうはならなかった。気に食わないところでそうでもないところの違いは分からない。もっとも、法廷で被告人になるような人物の好き嫌いは大抵の場合複雑に入り組んでいて統一的な理解ができないことが多い。ワインは好きでもブドウは嫌いなやつもいるのだ。
被告人が吠えてくれればしばらく検察官と論争させて時間を稼ぐつもりだったが、その目論見は潰えた。ということは、私がしゃべらなければならない。
「では証人尋問を始めよう。どちらの証人からだ？」
「目撃証人からです」
検察官は手元の書類の束をゆっくりとめくりながら余裕綽々に答えた。

「良いかな被告人？」
私はまた被告人に水を向けた。これも、時間稼ぎなのだ。
被告人はまた、曖昧に頷いた。彼の上あごには前歯がほとんどないのが分かった。

目撃証人は、年の頃は三十半ばくらいの男だった。頭髪はもう寂しくなってきているが、やたらと身なりを整えている。被告人の貧相な顔貌とは対照的である。多分、法廷をきちんとした場だと勘違いしているのだろう。そんなにきちんとした場なら、私はここまでまじまじと人の外ヅラをねめつけたりはしない。本来性別や年齢や髪の量や身なりで証言の正しさが決まるものではない。でも、裁判官はまずそういうところを見てしまう。裁判官だけではあるまい。検察官も、被告人もそうだろう。数学はそんなことはない。誰が言ったかで命題の正しさが決まるなんてことはない。そのへんの乞食が真理を突くこともあれば、プトレマイオスが間違いを犯すこともある。対照的に法廷では、まずは簡単に手に入る情報を確認せずにはいられない。せめて、この段階では少しでも虚心坦懐でありたいものである。ところが、「お手並み拝見」といったような大上段に構えた心持ちで目の前の人間を眺めてしまう。地位が人を傲慢にするのだろう。もっと謙虚でなければならない。
「証人は、お仕事は？」
「庭師です」
検察官がもう質問を始めている。名前は聞いたのだろうか。普通は最初に聞くはずである。
「今回の事件があった当日午後３時頃は何をしていましたか」
「ご主人様の庭で木を伐っていました」
「ご主人様というのは？」
「デシャン伯です」
「あなたがその日の午後３時頃仕事をしていた時に、何か変わったことはありましたか」
「はい。庭のぬかるみに靴跡がありました」
「ぬかるみというのは庭のどの辺にあるのですか」
「なんとも言いようがありませんが……、スコップとかを置いている庭の物置の近くです」
この辺は私も知っている事実である。であるだけに、聞いていると眠くなってくる。昨日やはり夜更かしをしすぎたかもしれない。あくびや居眠りをすると検察官からナメられる。ナメられないだけの威厳を手にしなければならない。それができないのであれば、夜更かしをしてはいけないのだ。一流と言われる裁判官は、たとえあくびや居眠りのようなポカであっても周りが勝手に「深い意味のある行動だ」と勘違いして解釈してくれるものだ。やっぱり人間は肩書ばかりを見ている愚かしい存在なのだ。
「足跡を見つけてあなたはどうしましたか」
「その足跡をもっと近くで見ようと思いました」
「近くで見ようと思ってどうしたんですか」
「あっ。歩いて近付いていきました」
「足跡に近付いていったということですね？」
「そうです」
「その後何が起きましたか」
「生垣の向こうからなんか騒がしい声が聞こえてきました」
「生垣というのはどこにあるんですか」
「ご主人様のお屋敷をぐるっと囲んでいます」
「ご主人様というのは先ほど証言にあったデシャン伯のことですね？」
「そうです」
「騒がしい声が聞こえたのはどのあたりの生垣からですか」
「物置のすぐ近くです。真裏ぐらいですかね」
やっぱりこのあたりの話はつまらない。検察官はいつも遺漏のないように細かいことまで念を入れて尋問をしてくる。被告人あたりの不規則発言があれば目も覚めるかもしれな

いが、それはそれで困る。被告人の方は、寝ているのか起きているのか分からないがうつむきがちに腕を組んで目を閉じている。
「生垣の方から向こうから騒がしい声が聞こえたということですが、向こうからということはお屋敷の敷地の外から聞こえたということですね？」
「そうです」
「お屋敷の敷地の外というのはどういう場所なんですか」
「公道ですね」
「公道の方から騒がしい声が聞こえたということですね」
「そうです」
「その声を聞いてあなたはどうしましたか」
「生垣の隙間から外を見ようとしたんですが、なかなか分厚い生垣で、何が起きているのかははっきり分かりませんでした」
「見ようとしている間は声は聞こえたんですか」
「聞こえましたね」
「何と言っていましたか」
「『大人しくしろ！』だとか『バカ野郎！』だとか言っていました」
「誰が言っていたか分かりますか」
「誰が言っていたかまでははっきり分かりません」
「騒いでいるのは何人ぐらいいたんですか」
「3～4人だとは思います」
「見えなかったのに人数は分かるんですか」
「見えないと言っても完全に見えないわけじゃなくて、小さな隙間から僅かには見えるので、見えた感じだと3～4人はいたという感じですね」
「その後あなたはどうしましたか」
「外の様子も気になったんですけど、さすがに仕事中に家の外に出るわけにもいかないので、物置に道具をしまって、屋敷に戻りました」
「以上です」
検察官は疲労感と昂揚感が混じったような表情で手に持っていた書類を机に置いた。その目つきは実に晴れやかである。あの程度の内容であそこまで晴れやかな表情ができる神経が分からない。この証人の話を最後まで聞いても、結局犯人を見ていなかったではないか。あのやりきったような顔つきも芝居なのだろうか。そうだとしたら、検察官というのも随分大変な商売である。
私は頭を抱えたくなる気持ちを抑えて尋問中に自分で書いていたメモに視線を落とした。きちんと集中して、きちんとメモまで書きながら一生懸命聞いていたのがバカバカしくなってきた。このメモも、途中からひどく殴り書きになっていた。それも筆跡はフェードアウトしていくかのように薄くなっていっている。証言に中身がなかったからだろう。
「証人」
私は狼狽を隠しながら口を開いた。検察官の方に目をやる余裕はなかったが、多分さっきの表情のまま証人に慈愛の視線を投げかけていることだろう。
「最後物置に道具をしまって屋敷に戻ったということでしたな」
「はい」
「その後はどうしたのかね」
「帰りました」
「帰る時に騒がしかった場所は見たのかな」
「見ようかなとも思ったんですが、私が普段出入りに使っている門のほぼ真裏の位置で、屋敷を半周しないとたどりつけなかったので、面倒くさくなって見には行きませんでした」
「生垣から外を覗こうとしてから帰路につくまでどれくらいの時間がかかったのかな」
「十五分もかかってないんじゃないですかね。ほら。普段は屋敷の執事さんに報告するんですけど、その日は不在だから勝手に帰っていいと言われていたんで、何も言わずに帰り

ました」
　この証人、私の質問にはいやに饒舌に言葉を紡いでくる。検察官から質問されていた時のコンパクトさが嘘のようである。多分、相当練習を重ねていたのだろう。
「生垣に泥が付いていたりしたのかな」
　私がまた証言台の庭師に質問を投げかけた。
「犯人が生垣を乗り越えたんだったら付いててもおかしくないでしょうねえ」
「いやそういうことじゃなくて、証人は生垣に泥が付いているのを見ましたか」
「生垣は注意して見ていないので分かりません」
　証人の頬はどこか紅潮していた。推測でしかないが、卑劣な犯罪者の断罪という形で社会貢献できていることが嬉しいのだろう。そういうことに喜びを見出すタイプの人間なのだ。検察官もそこをうまくくすぐってのせているのである。そのタイプを裁判官が相手するときに気を付けるべきことは、良い聞き手に徹することであろう。たとえ中身のない証言だったとしても、落胆や憤怒の感情を顔に出してはいけない。笑顔を見せ続けないといけない。「あなたの証言はこの裁判で大変役に立っている」「あなたの証言があるから結論が出せる」というメッセージを送り続けなければならない。いったんそこに疑いが生じれば反動でへそを曲げてしゃべらなくなったり怒りだしたりしかねないのがこのタイプである。とりあえず話してもらうべきことは最後まで話してもらわないとならない。まあ、最後まで話してもらったところで役に立たない時は役に立たないのだが。
　私は落胆の表情を出さぬように注意しながら被告人の方を見た。被告人の姿勢は最後に見た時から変わっていなかった。目を閉じて、腕を組んでいる。
「被告人。あなたから聞くことはあるかね」
　私は検察官の方を瞥見してから被告人に言葉をかけた。検察官は余裕綽々とした表情で被告人を睥睨している。被告人による質問を「必要ない」などと言って掣肘してくる検察官もいるが、今回ばかりは勝ちの自信が揺るがないのだろう。
　被告人は、目を閉じて座ったまんままくし立てた。
「裁判長。今の証言は何の意味があるのだ。彼は私を一切見ていないではないか」
　私は面食らった。もうちょっとむちゃくちゃなことを言ってくるかと思っていたが、一番検察官に効きそうな反論をしてきた。カタコトの外国人が拙い言葉遣いながら鋭いことを言った時のような驚きと感心が混じった感情が俄かに私の心臓を取り巻いてきた。
「裁判官。これは尋問の場です」
　今度は流石に検察官も茶々を入れてきた。多分私と同じような感情なのだろう。私は心配になって証人の方を見た。興奮は冷めやらぬ様子であったが、少し落胆の影が差し込んできているようにも見えた。
「被告人。この証人がこの場で証言したことが合っているか間違っているかはこの後吟味することだ。その点についてのあなたの主張は後で話す機会がある。今やるべきことは、証人が事件の火に何を見聞きしたかという事実に対する質問だ。分かるかね」
「分かりますよ」
　即答であったが、到底分かっているようには見えなかった。ただここで突っ込んで議論になっても面倒なだけなので、私も被告人の言葉を信じることにして話を続けた。
「それを踏まえて今一度お尋ねするが、この証人に聞きたいことはあるかね」
「じゃあ確認だ。当日私の顔は見たのかね」
「足跡を見ました」
　証人に顔は引きつってきているように見えた。
「質問に答えたまえ。私の顔は見ていないということでいいかね」
「顔は……見ていません」
「私の顔を見るのは今日が初めてのことということでいいかな」
「……そうです」
　被告人はそれきり黙ってしまった。証人も証言台に視線を落としている。私は少し申し訳ない気持ちになった。私もこういう場で証言をすることになれば頬を紅潮させるタイプ

なのだ。他方で検察官は、やっぱりすました顔をしていた。そこを突かれることは想定済みなのだろう。
「よろしいかな被告人」
被告人は座ったまま小さく頷いた。
「じゃあ証人。あなたへの尋問は終わりです。ありがとうございました」
庭師の証人は小さく一礼すると検察官の背後のドアから法廷の外へと消えていった。

「証人の職業を教えてください」
「警察官です」
２人目の証人は、年のころは四十代半ばといったところだろうか。両頬の毛穴が目立つ。口ひげを生やした犬のような顔だった。鼻の頭が、酔っ払いのように赤い。そうだ。こんなことではいかんのだ。まだ証言は始まったばかりなのである。信用性は値踏みのしようがない。
「その日の午後３時頃、あなたはどこにいましたか」
「通りを歩いていました」
検察官は先ほどと同じで落ち着き払っている。その口角は勝ち誇っているようにも見えた。
「通りというのはどこの通りですか」
「どこといっても……名前がないので口では説明が難しいですな」
「その通りに面している建物や施設は何かないですか」
「デシャン伯のお屋敷がございますな」
証人は思い出したように目を見開いた。それでもその目は万華鏡の中身のように小さかった。
「午後３時頃、その通りであなたは何かを見ましたか」
「私の方に向かって歩いてくる男性を見ました」
「その男性にはどのような特徴がありましたか」
「黒っぽい服だったような気がしますねえ」
「靴ははいていましたか」
「そりゃあはいていましたよ」
「靴にはどのような特徴がありましたか」
「泥が付いていました」
「付いていた泥の量はどのくらいでしたか」
「泥が足跡になって通りに残っていたぐらいだったので、結構な量だったのではないでしょうか」
「その男の顔は覚えていますか」
「覚えています」
「どのような特徴がありましたか」
「特徴は……口で説明できるようなものは特にないですが、とにかくただならぬ雰囲気だったのは覚えています」
「ただならぬ雰囲気、というのは具体的にどういうことですか」
「それも説明が難しいですが、上目遣いでこちらを睨みつけてくるような表情でしたね」
「その男は、この法廷の中にいますか」
「います」
「誰ですか」
証人は向いている方向を変えぬまま明朗に呼ばわった。
「被告人です」
「あなたの右側に座っている被告人ということでいいですね」
「そうです」
「なぜそのように言えるんですか」

「なぜって……顔が一緒ですね」
「当時見た男と今ここにいる被告人の顔が一緒ということですね」
「そうです」
「あなたは通りで被告人を見た後、どうしたんですか」
「やはり表情や挙動が不審だったので、ちょっと質問をしておこうと思いました。」
挙動不審、とはハッキリ言わずに間に「が」を入れたのは証人なりに言葉を選んだ結果だろう。ただあくまで警察官という小役人の猿知恵である。私は目の前で悪口を言われた被告人の方を見た。手の甲を下にして指を組んでいる。その感情から揺らぎは感じられなかった。
それにしても、分かっていたことではあるが、警察官はまず見た目で職務質問を誰にするかを決めているのである。警察官からちょっかいを出されないようにするには、まずは身なりを整えるのがコツなのである。
「あなたは被告人に声をかけたということですか」
「そうです」
検察官はさっきまで「男」と言っていた人物のことをもう「被告人」と言っている。「同一人物だ」という証言が先ほどとれたからである。
「何と声をかけましたか」
「ちょっとよろしいですか、と言いました」
「それを聞いて被告人はどうしましたか」
「何も答えずにくるりと踵を返して反対方向に早足で去っていこうとしました」
「踵を返したというのは……」
「Uターンしたということですね」
何も検察官がアホで「踵を返す」という表現を知らないから聞いたわけではない。この尋問も記録にとっているから、分かりやすい言葉で記録に残しておいた方がいいという判断である。
「あなたはどうしましたか」
「これは怪しいと思って追いかけました」
「その後どうなりましたか」
「被告人が進む方向から別の警察官２名が歩いてきました」
「その警察官はなぜそこにいたんですか」
「警邏中に偶然通りかかったという話でした」
「その後どうなりましたか」
「被告人はその２名の警察官にも気付いた様子で立ち止まって若干後ずさりしました。私は追いついて彼の肩に手を置きました」
いよいよ証言も山場に入っている。いや多分大した話は出てこないだろうが、そう言い聞かせて自分を奮い立たせないと居眠りをしてしまいそうである。
「肩に手を置かれた被告人はどういう行動をとりましたか」
「『バカ野郎！』と大声で言ってそのまま走り去りました」
「どこに走り去ったんですか」
「２人の警察官が来ていた方です」
「その後どうなりましたか」
「私はあっ！　と言ったんですが、２人の警察官が呆気にとられた状態のまま被告人はその二人の間を突破して走り去ってしまいました」
「あなたは追いかけましたか」
「ええ。走って追いかけましたが、見失ってしまいました」
ほらこの通りである。大した話は出てこなかった。
「以上です」
検察官が着席した。証人はつぶらな瞳をより真ん丸にしている。被告人はと言えば、完全に寝ているように見えた。首があらぬ方向を向いている。

「被告人」
私が呼び掛けても被告人は反応しない。
「被告人」
もう一度呼び掛けた。一回目より大きな声を出したつもりだったが、あまり変わらなかった。みなが厳粛な空気を出すからこちらも萎縮してしまうのである。
被告人の隣の廷吏が被告人の肩に手をかけると、被告人はその手をゆっくりと振り払い、やおら口を開いた。
「バカバカしい」
私は被告人に問いかける。
「被告人。あなたから証人に聞くことはないかね」
「聞くも何も全部がデタラメだ。あんた、王に仕える公僕の身でそんなデタラメばかりで恥ずかしくないかね」
被告人は今にも証人に詰め寄らんとする勢いであった。証人は流石に警察官である。この手の状況には慣れているのであろう。動揺しているようには見えない。私も動揺を必死に隠している。それを悟られると証人にも検察官にもナメられてしまうのだ。
「今のが質問だ！　聞いておるんだ証人！」
被告人の昂揚はどんどん熱を帯びていっている。証人はそれを挑発するかのように正面の私をずっと見ていた。被告人には目もくれない。
すかさず検察官が口を挟んだ。
「裁判長。威圧的なうえに評価を求める質問です。制止してください」
こういうことを言ってくるからには、多分私をナメているのだろう。私も目の前のモンスターに対処するのは嫌なのだ。
「被告人。事実を聞いてください」
「事実とは何かね」
被告人は依然として頭を振り回していたが、若干落ち着いたかのように見えた。
「当日何があったかを聞いてください。その評価は我々の仕事です。証人には、事実を話してもらうのが裁判です」
「どうせ何を聞いたところでデタラメしかしゃべらないだろうよ」
「じゃああなたからの質問はないということでいいですか」
「そうだ、と言うとどうなるのだ」
「この証人への尋問は打ち切りになります。証人には帰ってもらうことになります。裁判ではこの証人からそれ以上の証言は聞けません。ここまでしゃべってもらったことだけから私が判断をすることになります」
ここまで丁寧に説明してやるのも珍しい。多分私は暴れる被告人に恐懼しているのだ。そしてそれは、検察官も証人の警官も敏感に感じ取っていることだろう。ただ私への尊崇の念はもっと前の段からとっくに底を突いているだろうから、これ以上見栄を張ることもあるまい。
「じゃあすぐ判決になるのか」
「最後に検察官とあなたが最終的な自分の考えを述べる機会があります。最終陳述というやつですが」
「それが終わったら判決か？」
「今日出すわけではないですね。次回の期日を今日決めて、その日が判決期日になります」
「私の言いたいことは一つだ。この警官の話していることは全てデタラメだ」
「それはあなたの考えなので、最終陳述の時に言ってもらえればいいです」
「ではこの証人の尋問は終わりでいいさ」
「分かりました。では証人尋問に終わりにします。証人！」
これまでずっと蚊帳の外で黙していた証人は、私からの呼びかけに機敏に視線を合わせてきた。
「お疲れ様です。ありがとうございます」

証人は立ち上がって一礼をすると、静かに法廷を出ていった。

その後の検察官の最終陳述は、まるで耳に入ってこなかった。被告人も警官の言っていたことはデタラメだという話を繰り返すばかりであった。結局、何も分からないのである。

庭師も警官も肝心なところを見ていない。庭師が見た足跡は誰のものだったのか。警官が被告人だったと断言していた男は何をしていたのか。何も分からないのである。

「そんなもの、分からなくていいのだ」

と院長なら言うであろう。裁判所なんて世間に「きちんと手続を踏んだ」と言い訳をするための組織に過ぎないと考えているのがあの人である。そこまで割り切れるのも、幸せなことだといつも思う。そんなことのために知恵をしぼらなければならないのは、人類にとっての不幸であろう。

私は目の前の判決書に視線を落とした。全く進んでいなかった。中身のないものは書こうと思えば書ける。一読するともっともらしいが、熟読玩味するとさっぱり要領を得ないような内容のやつだ。ただそれだって、書くのは大変なのである。きちんと論理が筋道だっている数学の論文のような判決書の方が、よほど書くのは楽である。

もう尋問の期日から1ヶ月は経とうとしている。ここまでずるずる引き延ばしてきてしまった。あと1ヶ月しかない。

「失礼します」

いつもとは違う書記官が自分の台詞も言い終わらぬうちに入ってきた。よほどせっかちかよほど慌てているかのどちらかであろう。慌てふためいた面差しからは、後者であることが容易に想像できた。

「判事。収容されていた例の僧侶が、収容所を脱出して逃亡したようです」

「ほう？」

声は上ずった。ダメだ。これでは喜びが混じったことがバレてしまう。

「王党派の中の過激派が脱走を手助けしたのではないかとか色々言われていますが、まだはっきりとしたことは分かりません」

「手助けってのはどういうことだ。壁を爆破して穴でもあけたのか？」

「そのへんもまだ全く情報がありません。そういう派手なやり方だったのか、それともこっそり抜け出したのか、そのあたりも一切分かりません」

「ふむ……」

私は考えるふりをして腕を組んだ。その実何も考えてはいなかった。それでも判決を書かなくてもよくなったという偶然の慶事に接すると、自然と笑みがこぼれてきてしまう。こんなに表情が豊かだからこそ、私は裁判官なんかできないのである。

「分かった。ありがとう。詳しいことが分かったらまた教えてくれ」

「はい。失礼します」

私は書記官を追い払うとまた腕を組んだ。すると，徐々に頭の中の隅の方から暗雲が垂れ込めてきた。いや待て。この件はもう証人尋問も全て終わっていて、あとは私が判決を書くだけという段階にまで進んでいる。そういう場合は被告人がドロンしても判決を書けたはずである。書けたというか、書かなければならないはずである。調べようか。調べるまでもない。それがルールである。有罪判決を出してくれた方が被告人の捜索にも力を入れられるだろう、と院長が何かの機会に言っていたような気もする。もしや、判決を書きたくない一心で勝手に早とちりをしてしまったのだろうか。自分に都合のいいように物事を歪めて解釈してしまったのだろうか。

きっとそうなんだろう。やはり、人間という生き物はしょうもないのだ。